
幸と不幸は紙一重

わらびもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸と不幸は紙一重

【Nコード】

N5840R

【作者名】

わらびもち

【あらすじ】

「頭の中から声がする」なんだかアレな高校生、鈴代理沙の日常は、とある出会いにより一変する。魔法だとか魔女狩りとかビリビリとか、個性的と言えば響きはいいが要はただ単にカオスなメンバーが織りなすんだか自分でも作っててよく分からなかったモノガタリ、開幕！！

幸と不幸は紙一重 日常の終わり（前書き）

：あれですよあれ。衝動に身を任せちゃったぜアハッ☆みたいな感じで書きました。単にオリジナルが書きたかっただけですすみません。設定がつまらなかったらすみません。gdgdだったらすみません。

では始まります。

※オリジナルです。

※もしかしたら残酷描写とか入るかもしれません。その時はタグつけます。

幸と不幸は紙一重 日常の終わり

ドゴンッッ!!

走る少女のつま先をかすめ、高圧の水柱が地面から立ち上った。人氣のない路地裏を、少女は全力で駆け抜ける。つややかなポニーテールが舞った。

突如、脇にある建物にまるで水面のように波紋が広がった。

「っ!!」

少女はとっさに頭を下げた。つい一瞬前その顔があったところに、再び水が突き抜ける。

「あーあ、惜しいなあ」

明らかに惜しんでいる声を、少女の耳は聞き取った。前から聞こえたので、構わず引き返す。

「いくら逃げても、無駄なんだけどなあ」

構わず、走る。

「いいから早く…殺されてくれよ!」

構わず。

どうしてこんな事になったのか、少女は冷静に思い出していた。

その日。彼女の通う高校の学生寮でのことだ。ちなみに個人部屋で、寮そのものはマンションのようになっている。五階という良ポジションも、隣のマンションが日光を横取りしてしまうため、あまり機能していない。

鈴代理沙すずしろさの朝は、普段より15分早く始まった。

大した事ではないが、なんとなく嬉しくなって、制服に着替えながら鼻歌を歌う。すると、

「そこ、音程ずれてるわよ」

と、どこからともなく声が聞こえた。理沙は鼻歌を歌いっぱなしなので、当然彼女の声ではない。

『ねえ、理沙。聞いているの？』

「聞こえてるわ」

ようやく理沙は鼻歌をやめ、部屋の天井を仰いだ。と言っても、声の住人は上の階にいるわけでもない。

この声は、理沙の頭の中から響いてくるのだ。

「そういえば、あたしの中にルーシイがやってきたのって、今から一年くらい前だったけ？」

『ええ、そうよ。去年の五月十五日、午後八時三十八分だったわ』

どこからともなく声が響いてくる、という人は世間一般ではアブナイ人と認識されているが、少なくとも理沙はクスリは医者から処方されたクスリしか服用していないし、注射だってインフルエンザの予防接種しかしていない。

「今じゃ平然としてるけど、あの時は大変だったんだからね？自分の頭が変になったのかと思ったんだから」

『そういえば、理沙ったら、慌てふためいちゃって、可愛かったわね』

「もお、ルーシイったら」

昨年のこと。

リビングでテレビを観ていた理沙は不意に、自分を呼ぶ声を聞いた。驚いた理沙は急いでテレビを消し、その声を注意深く聞いた。

声は、自らをルーシイと名乗り、突然ですまないが理沙の中に住まわせてくれないかと頼んだ。色々ついていけなかった理沙は、言われるままに頷いた。

それから、理沙の中にもう一人の人格が住み着くことになった。しかし、いくら理沙が頼み込んでも、ルーシイは決して、己の事を語

ろうとしなかった。

それでも、理沙にとってルーシイとともに過ごす時は楽しかった。彼女はいつも理沙の味方でいてくれたし、尚且つ優しくしてくれたためだ。

『：せっかく早く起きたんだから、ちゃんとした朝食を作ればいいのに』

「いいのよ別に」

理沙はそっけなく答え、恒例の手抜き朝食を作る。

『しっかりした彼氏でもいれば、貴方の生活ももう少しマシになるんじゃないかしら』

「はいはい。どーせあたしはモテないですよーだ」

『そうかしら？ 私から見たら、理沙って結構魅力的だと思うんだけど』

「ふふ、ありがと」

そう言って理沙は、新品の靴で玄関を駆け抜けた。

そこまでは、確かに理沙の日常だった。

早く起きたくせになぜか遅刻ギリギリで教室に突入した理沙を、朝の騒がしいクラスメイトが迎えた。

「理沙ーっ、おはよー！ ごめん席勝手に使ってる！」

「よ、よお、鈴代！ すまん百円貸してくれ！」

「お前、千円札崩せばいいじゃねえか：なんで女子に？」

「ちょ、おま、その引きは反則だぞ！」

「はあ？ さっきこれの効果で手札に持ってきたんだよ大ボケ野郎」

「あーっ！ 数学の宿題やってない！ どうしょー！！」

「私の見せてあげるから落ち着いて」

「しまったああああっ！！ 今週号買うの忘れたああああっ！！」

とっさに耳を覆いたくなる光景だが、理沙はこんな日常は嫌いではなかった。彼らというのは楽しかったし、何よりここが彼女のいる

べき居場所だったからだ。

「：ちよつと、いいか？」

「あ！うん：」

後ろから声がした。振り向くと、細身の少年が立っていた。どうやら入口をふさいでいたようだ。慌てて理沙は自分の席に着く。

「ねえ、本田君、理沙に気があるんじゃない？」

「まっさかあ」

途端、前の席の親友、香織に話しかけられた。おしとやかそうな名前（？）と裏腹に、ミーハーな少女である。

ちなみに本田はさつき理沙に小銭を貸してくれるよう頼んできた男子だ。どさくさにまぎれてスルーしてしまったが、彼は気にしてないだろうか？

理沙が彼の席に目をやると、本田と目があつた。彼は照れ臭そうに頭を掻く。

「ほらやっぱ怪しいでしょ？」

「そう？」とてきとうに返しておく。理沙はそこまで彼と親しくないので、そんなはずはない、と思っている。

それにしても、知らない人ばかりの新クラスで友人と近い席になれたのは幸運だった。

そう、彼女は、理由は分からないがとにかく幸運なのだ。くじの類を引くとほぼ確実に一等がでるし、テストの記号問題も百発百中。

しかし彼女は、幸か不幸か、その事実に気づいていない。：まあ、彼女は不幸なはずはないが。

「やっぱ怪しいわ。ここは私が放課後に聞いただして：」

「やめなさい」

彼女がどんなに幸運でも、それは理沙の日常に違いなかった。

放課後。

本当に問いただしそうな香織をなんとか引きとめて、理沙はやっと帰路に着いた。人もまばらな商店街を歩く。

「まったく…香織もしつこいわね」

『いいじゃない。そんな楽しい友達がいて…。私にはいなかったものの』

「…！」

理沙は初めて、ルーシイが自らのことを語るのを聞いた気がした。

「いるじゃない、ここに」

『……理沙…』

ルーシイは、なぜかどこか、少し寂しそうだった。でも彼女が自分の友達である事を認めてくれたのが嬉しかった。

「えへへ、私ったら、こんな楽しい友達ができるなんて…」

「幸運よね」

その瞬間。

理沙は、とある事に気付いた。

「あれ…人が…」

いない。

さっきまでにぎわっていた商店街が、もぬけの殻になっていた。

「おかしいわね。なんで誰も…」

『理沙…』

「…ルーシィ？」

唐突に、ルーシィの声が変わった。その声に含まれているのは…恐怖。

『…逃げて』

「…ルーシィ…」

当然理沙とルーシィは一心同体なので、ルーシィの恐怖は驚くほどに伝わってきた。

「分かったわ。今日はまっすぐ帰」

「帰すと、思うかい？」

見ると、前方に一人の青年がいた。何の前触れもなく。

彼は高級そうな服に身を包み、なぜかミネラルウォーターのペットボトルを持っていた。肩まである黒髪が、風に吹かれてさらさら舞う。その風は、理沙の鼻にきつすぎる香水の匂いを運んでくる。キザそうな顔立ちが、複雑な笑みを浮かべる。

「……！」

理沙は、ルーシィがこれ以上ない位怯えているのが分かった。つばを飲む。

しかし、理沙はこれをチャンスともとっていた。

ルーシィが怖がつているこの男なら、何かルーシィの事を教えてくれるかもしれない。

全く場違いな事に、そう思ってしまった。

「あなた…誰？」

「分からないかい？ 宿主」

青年は、やはり知らないのか、といった意味を込めて返答した。この瞬間分かった。理沙は彼を好きになれそうにない。

「宿主？…私が？」

今商店街には理沙と青年（あと、ルーシィ）しかない。つまり、宿主とは理沙の事を差すのであった。

「まあ、冥土の土産に説明くらいはしてやるよ。追いかけてこしなからでもいいよね」

理沙は、なんとなく思った。

この人は、理沙を人間と思っていないような態度をとっている事に。しかも、冥土の土産と言う事は…。

「さあ、愉快なDEATH GAMEの始まりだ」

青年は持っていたペットボトルをさかさまにした。透明な水が商店街の地面に跡を付ける。

その瞬間、彼の足もとから水柱が噴出した。丸ごと理沙を飲み込めそうなその柱は、理沙に向かって一気に突き進んで行く。

「……！？っ…」

理沙はとっさに青年に背を向け、走りだした。幸運にも、水柱のスピードはそれほど速くない。

「そうそう、そうこなくちゃ！」

後ろから青年の声が聞こえる。だが、いきなり殺されようとしている今の理沙にいちいち聞いている余裕はない。走る。

「何よ…何なのよ、あれは！」

『突然人が消えたのは“人払い”…あの水柱は…まずいわ』

「！ルーシィ…？」

『…ごめんなさい、理沙。私…ずっと、隠してた事があるの』

「……？」

触れれば理沙など一瞬ではじけ飛びそうな水柱から必死に逃げながら話す。息が乱れているのに、普段よりずっと、ルーシィの声が良く聞こえた。

「…って、あれ…？」

振り返ると、水柱が忽然と消えていた。撒いたか、と理沙が一息ついた、瞬間。

理沙の足もとに、波紋が広がった。

『理沙：逃げて！！』

「！？」

今まで聞いたルーシイの声の中で一番必死な声を聞き、理沙は反射的に後ろに飛びずさった。

途端、

波紋の広がったところに、水柱が突き抜けた。

「チッ：仕留め損ねたか」

逃げまどう理沙の50メートル後ろ、青年は残念そうに舌打ちをした。彼は、どんな事があっても理沙を殺すつもりだった。彼には、ひとつの使命にも似たものがあるからだ。

「まあいい、宿主一匹ごとき、日が暮れるまでには十人は殺せる」あの水柱は、移動速度は遅いものの、どこへでも出現させる事ができる。ただの宿主ごときに避けきれぬわけではない。

「さて：そろそろトドメかな」

理沙を遠くから見つめ、笑みを浮かべる青年は、気付かない。自らもまた、誰かから見られている事に。

突然の水柱はとっさに避けたが、理沙はもう歩けないほどに体力を消耗してしまった。呉服店の壁にもたれ掛かる。

「はあ：はあ：なんで：？」

彼女の頭の中は、何故自分が殺されなければならないのか、一色だった。しかも、散々思わせぶりな態度をとって結局振った彼氏でも

なく、会ったばかりの赤の他人に、だ。「教えてよ…ルーシィ…」
もう一人の理沙は、答えない。代わりに、

「じゃあ、僕が教えてあげようか？どうやら君の寄生虫は君に嫌われるのが余程怖いらしいね…最高じゃないか」

いつの間にか後ろから歩いてきた青年が答えた。

「！！…なんでルーシィの事を…それに、何よさっきから宿主とか寄生虫とかって！」

「へえ…やっぱ何も知らないんだ？なら、なおさら教えてあげよう」

『…やめて！！』

「…ルーシィ？」

『…言わ…ないで』

しかし、その懇願も、青年はあっさり無視して、

「君の体に憑いているその声はね、信じられないだろうが、数百年前のヨーロッパの…殺されし魔女の物なんだよね」

語り始めた。

幸と不幸は紙一重 日常の終わり（後書き）

：いやー前からオリ小説書こうって思ってたんですけど、まさかこんなことになるとは：

詳しい設定は次回です。できるだけ早く投稿したいと思います。

幸と不幸は紙二重 忍び寄る死の匂い (前書き)

急いで書いたので短いです。ご容赦頂けたらとおもいます。

※前回言いそびれましたが、感想等ありましたらどんどん願います。

幸と不幸は紙二重 忍び寄る死の匂い

「…何言ってるの？」

理沙は呆然とした。何なのこの人頭大丈夫かしらここから一番近い精神科ってどこだっけ？

直後、自分がそんな人に襲われている事に気付いて複雑な気分になった。

「…やれやれ、頭の弱い宿主だな。一から説明しないと分からないクチか？」

あんたに頭の事を言われたくないというように、理沙は言い返した。「だいたい、散々人を追い回しといていきなり何なのよ。そういえばさっきの水柱ってどうやったの？」

「そのままさ。魔法、だよ。まあ僕の事はどうでもいいか。知りたいののは君の“中の人”の話だろう？」

「！！…そうよ。とっとと教えなさい」

青年は笑みを深めて、

「まあさっきも言ったけど、昔ヨーロッパでさかんに行われた“魔女狩り”…君も多少なりとは知っているはずだ。有名だからね」

「一般人が多数虐殺されたから…？」

「正解。まあ大多数は魔法のまの字も知らない一般人だったんだけど…じつは、本物の魔女もその中にいたのさ。どうだい？」

「…だから、なんだってのよ？」理沙は言い返した。「そりゃあ生き残りがいるとか言われたらちよつとビビるけど、もういないんでしょう？私の勝手な見解だけど」

それを聞くと青年はおかしそうに笑って、

「おいおい、それは生き残りに失礼なんじゃないか？なあ寄生虫」

「：なんだか、まだ生きてるような口ぶりね。あと寄生虫って誰よ私の友達の事を言ってるんだったら今ここでぶっとばすわよ」

ここまで聞けば、頭の悪い理沙でもだいたい事情は分かる。青年は実は魔女たちの一族の生き残りで、その血が彼に魔法とやらを使わせているのだろう。あの水柱のせいで、魔法を疑う余地もない。でもそれでは、理沙を襲う理由にはならないはずだ。

「：くっ、あははは！！友達？君の頭の中の寄生虫が、友達だって？」

青年が初めて、心から愉快そうに笑った。

「ははっ：いいね。友達か：面白い言い方をする。どうやら君は勘違いしていた様だけどね、」

そして青年は、

「さっき言った魔女の生き残りが僕の事だと、本当にそう思っているのかい？」

まぎれもない、

「生き残りというのも、半分間違っているけど：魔女は、君の頭の中にいる」

変えようのない、

「魔女狩りにより、魔女は男女関係なく全滅した。でもそれは肉体だけだ。命が絶える瞬間、彼らはひとつの魔法を起動した。：魂の、転生」

事実を、

「魂と肉体っていうのは波長のようなものがあって、それがシンクロしないと魂も肉体も朽ちてしまう。だから自分の魂と波長の合う肉体を見つけるまでさまよい：見つけたら、時間をかけて、」

口にした。

「乗っ取る」

つまり、ルーシィが殺された魔女で、しかし彼女は自分自身に魔法をかけ、波長の合う肉体……鈴代理沙を見つけ：乗っ取る最中だと

いう。

「…そんなの…信じられるわけ、ないでしょう…」

「じゃあ聞いてみれば？ 君の友達とやらの」

「…!!」

思えば、ずっとルーシィは黙ったままだった。

「ルーシィ…なんで…？」

親しくしてくれて。

友達だと、思っていたのに。

…裏切られた…？

「…さて、もう十分絶望したよね、宿主？」

青年が数歩遠ざかって、

「良い夢を」

指をパチン、と鳴らす。

今までとは段違いの大きさの水柱が現れ、

一瞬で、理沙を飲み込んだ。

幸と不幸は紙二重 忍び寄る死の匂い（後書き）

はっはっはー…もう二次創作が恋しくなってきたぜえ…

予想通りに執筆、投稿できない事ってザラにありますよね。もしかしたらまた新しい小説を書くやもしれません。

感想、（批評でも構いません）
お待ちしております。

幸と不幸は紙三重 幸運は誰のために（前書き）

つ…疲れた…。早く、俺にギャグパートをつ…!!

始まります！

幸と不幸は紙三重 幸運は誰のために

「…うっ…」

水柱の中で、理沙はうめいた。しかし、言葉の代わりに呼気が泡と
なって消える。

（苦しい…死…死ぬ…!!）

今までの思い出が、脳内を駆け巡る。これが走馬灯なのか、と気の
遠くなりつつある頭で考える。

親友ができて。

日常が楽しくて。

ああ…私の人生って…

ラッキーの連続だったなあ…。

そう思うと同時に、思い出が遠くなっていくのを感じた。同時に、
意識も遠くなっ…

遠く…

遠く、……ならない。

「ごほっ！…げほっ！！」

いつの間にか、理沙は商店街のむき出しの土に座っていた。身体が濡れて、冷えるのが感じられる。

「けほっ…何が…？」

理沙は混乱していたが、それより青年の方が動揺していた。

「な…何が…！？僕の“クラーケン”は確実に対象を飲み込むはず…！！どうして…」

『…理沙！！逃げて！！』

「！！ルーシィ…！？」

いきなり話し出したルーシィに理沙は困惑するが、

「…確かに、この隙に…！！」

その言葉に従い、何かをぶつぶつつぶやき続ける青年の横を、音を殺して駆ける。

『理沙…ごめんなさい…』

走る理沙の頭中に、ルーシィの懇願する声が響いた。

「…ルーシィ」

理沙の一言にルーシィはビクッ！と身体を震わせ（たような感じになり）、

『…あの人のいった事。あれは、確かに全部本当の事だわ』

「…そう」

理沙は走りながら俯き、

「…ふざけないで、って叫びたいくらいだけど、今なら特別に言い訳を聞いてあげるわ」

微笑を浮かべた。

なぜなら、彼女は友達だから。

たとえ裏切られたとしても、それは謝れば十分許せる程度の事だから

ら。

理沙はそう思う事ができるくらい、幸運な人間だから。

理沙は走りながら、ルーシイの話を聞いた。途中で細身の少年とすれ違ったが、気にもならない。

『私とローラン…恋人は、何年も何年もずっと一緒だった。私は魔女だったけど、彼は受け入れてくれて、しかも私と同じ道を選んでくれた。…嬉しかった。だって、もっとずっと一緒にいられると思ったから』

理沙は驚愕した。

人間とはこんなにも、言葉に『好き』を込められるのか――

『でも、それは唐突に終わった』

「え…？」

『魔女狩りの手が伸びてきていたの。術からみて、さっきの青年はその子孫…さしずめ転生後の魔女たちを狩ろうと思っていたところね…その気になれば私一人で逃げられた。でもどうして、一生愛すると誓った彼を置いてみっともなく逃げられるかしら？…魔法が使える分、魔女に傷をつけるのは難しいのだけれど、ヤツらはいとも簡単に私の下半身を吹き飛ばした。』

何か対魔女策があったんでしょね…そして、私とローランは、最後の瞬間…』

「魂の転生とかいうのを使ったのね」

『ええ…でも、あの青年はひとつ言い忘れてたみたい』

ルーシイは心から申し訳なさそうに、同時にどうしたらいいのか分からないように、

『魂の転生は…術のキャンセルができないのよ』

「え…」

立ち止まる。いつの間にか理沙は、商店街の外に出ていた。“人払

い”とやらはもう範囲外なのか、まばらだが人の姿も見える。

『ごめんなさい：私、あのときは彼と一緒にいたただけなのに：術を使って転生したとしても、また会えるとは限らないのに：理沙との時間は楽しくて、言い出せなかった：』

「ルーシィ：もうなっちゃったものは仕方ないわ。これからの事は：お腹すいちゃったから、夕飯食べてから考えてもいい？」

『理沙：ありがとう』

しかし二人は気付かない。

“人払い”の中で、人とすれ違った事に。

「：くそっ！！」

青年は商店街の土を叩いた。

「こんなはずじゃ：なんだ、あの宿主は：！！僕の術が、効かない：？いや、吸収に近いか：？」

彼の“クラーケン”は数多の宿主を葬ってきた。無効化されたのは初めてである。

青年：相原恭二は、魔女狩りをしていた者たちの数少ない直系の子孫である。彼に与えられた使命は、宿主の抹殺。なぜなら、身体を乗っ取った魔女たちが暴走するのを防ぐため。魂の転生なんていう不安定な術を使ったとすると、精神状態まで不安定になりやすいのだ。

あの寄生虫はまだ安定していたように見るが、いつ暴走するかも分からない。

「：あ：？」

そこで初めて、彼の獲物が忽然と消えているのが分かった。しかし彼はプロである。感知魔法など逆立ちしながらでも使える。

「まずは：位置を特定して：……あ？」

彼はそこで初めて、自分の数メートル先に一人の少年が立っているのに気付き、

「…!?!」

間が抜けたように立ちつくし、ようやく、気付いた。

「…っ!?!」

人殺しのプロである彼に気配を察知させず、なおかつ“人払い”の中を涼しい顔で通り抜ける存在は、限りなく危険である事に。

その少年は、眉をひそめて、

“……………”

唐突に、ゆがんだ笑みを浮かべ：

“……………ヒヒッ”

商店街を、雷の槍が貫いた。

幸と不幸は紙三重 幸運は誰のために（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます！！次回は純情少年がドキ☆ドキするお話です！！感想等お待ちしております！！

幸と不幸は紙四重 青春の1ページ(前書き)

久しぶりに投稿してみました。かなり短いです……。

幸と不幸は紙四重 青春の1ページ

商店街を出て徒歩五分のところ。

その路地裏に、理沙は座り込んでいた。
なぜなら。

「服が……っ!!」
そう。

あの、なぞの青年の一撃で、彼女は濡れ濡れのスケスケ状態になっていたのである。

『理沙、大丈夫?』

「問題ないわ」

とは言ったものの、このまま帰るのも恥ずかしいし、かといって乾くまで待っていたら風邪をひいてしまう。

さてどうしようか、と思っていた理沙の視界の端に、

一人の少年の影が、落ちた。

青年は、民家の屋根に寝転がっていた。

否、倒れ伏していた。

原因は一つ。

あの正体不明の少年の一撃で、商店街から遠く離れたここまで吹き飛ばされてしまったのだ。

「は……は……ッ!!」

血の塊をはきながら、青年は考える。

（追撃は……こない。不必要と思ったのか、もしくはなめられてい

るのか。どちらにしろ、一応は助かったか)

彼は水を操る術を得意としている。

冷静に魔法を使い、傷口をふさぐ。

今まで、水属性の術に失敗したことなどなかった。

そう、あの時まででは。

(問題は……あの宿主か。あんな現象は、見たことがない。まるで、魔力が根こそぎ吸い取られているようだった)

青年は、ゆっくりと起き上がる。

すでに、それほどまで回復していた。

路地裏の影。

その主は、はたしてクラスメイトの本田だった。

「え?……本田くん……?」

「向こうにお前の鞆が落ちていて、そこから水滴が延々と続いていたんだ。それを追いかけてきた」

うずくまる理沙に鞆を投げる本田の口調は淡々としている。

しかし、本心では湧き上がるムラムラを抑え込んでいるはずだ。

なにしろ、目の前にスケスケの好きな女がいるのだから。

「お前に何があったかは知らない。でもこんなところでうずくまっていたら風ひくぞ。」

……俺んち来るか?」

傍から聞けば危険なセリフだが、今の理沙からすると宝くじが当たったような気分だった。

幸と不幸は紙四重 青春の1ページ（後書き）

キケンな展開になってきたああああああああああああああああああああああ
ああ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5840r/>

幸と不幸は紙一重

2011年10月7日21時20分発行